

第 72 話<死につぶれ>の要約と参考資料

第 72 話<死につぶれ>の要約

土呂久鉦山跡の見学者の中に、7 人家族が死に絶えた喜右衛門屋敷の前で「どうして逃げなかったのか」と質問する人がいます。<火事に追われた三ヶ村にいつの日か家を再興する>という一族の悲願を語って、悲劇の裏にあった家族史に思いをはせてほしいと答えます。

第 72 話<死につぶれ>の参考資料

7 2 - 1 喜右衛門さんと百熊さん

富高コユキさんの話（1979 年 11 月 5 日聴取）

タカ（利喜治の長女、政太郎の妻）の母は、タカを産んで産後の肥立ちが悪くて死んだ。そのあと利喜治が三ヶ村へ働きに行った。そこでモヨと知り合うた。跡取りじゃから、わしにも子供がおるから、身ごもっていてもいいということで、後添えにモヨをもろうたらしい。喜右衛門の妹のズギとスミが三ヶ村に嫁いだ。じいさん（藤治郎）の出あとじゃから、利喜治は働きに行ったとでしようね。

喜右衛門と百熊は、気性が違えば、体つきも違う。後妻の連れ子が喜右衛門。喜右衛門はケチで気性はようなかった。

喜右衛門の三人の娘、ツギミは私より 1 級下、サツキはその 1 級上。同じ年の娘があまりいなかったの、遊んでいた。サツキやツギミが友だちにつるし柿とか勝ち栗を食べさせようとすると、喜右衛門が「なんでもかんでも食べさせるものでない」と怒りよった。ケチじいさんじゃった。アヒで体が弱っちゃったからか……。

百熊の住んでいた家が「母屋」で、喜右衛門の家は倉庫。百熊がよそへ働きに行つて帰ってきたので、喜右衛門は下の家（新しい家）に降りた。もとの古い家に百熊を住ませた。本来「かな山」は百熊屋敷のこと。「かな山」の上の百やんの家、「かな山」の下の喜右衛門の家といいよった。

喜右衛門は「おれん方でかな山が始まった」というので威張つとった。地主じゃから、鉦山師がみな相談に行きよった。鉦山の経験もあつたんでしよう。1 年あやってみて、資金足らずでやめる。2 年でやめる。そんな鉦山師に喜右衛門が立ちおうて、昔掘つた鉦石から調べよった。喜右衛門は山のことに詳しかった。若いときから鉦山ブローカーみたいなことをしよった。

7 2 - 2 百熊屋敷

佐藤トヨセさんの話（1977年1月23日聴取）

2人は父親違い。利喜治さんの実の子の百熊さんにも家を建てて与えようというので、喜右衛門屋敷と2軒並べて建てた。

富高暁さん（喜右衛門さんの甥）、富高コユキさんの話（1979年11月5日聴取）

利喜治は、喜右衛門にあとをとらせる代わりに、下の家（新しく建てた）に百熊を住ませるつもりだった。ところが喜右衛門は、百熊に家を渡して、自分は新しい家に住んだ。2人は仲が悪かった。嫁さん同士も姉妹。百熊が出ていった。

佐藤カジさんの話（聴取日不明）

百熊屋敷は、元は良蔵さんのおとっさんの弟、元蔵さんが建てた家。元蔵さんは腰かけて、浄瑠璃を語りよった。目のしれんごとなったとは76じゃったがの、それから11年して死なしたとよ。

72-3 佐藤喜右衛門さん

富高暁（喜右衛門の甥）さんの話（1979年11月5日聴取）

喜右衛門は地主じゃった。2番坑で垂ヒを焼いた。いちばん最初に焼いた。あひやきの先生でしような。

夫婦とも喉をやられたが、村の人たちは悪口を言っていた。「夫婦いっしょに寝て、咳して、頭かち合わせて火がでよる」

高見保（喜右衛門の妹スミの長男）さんの話（1972年2月聴取）

大正14、15年ごろ喜右衛門のところに遊びに行った。喜右衛門はものが言えず、顔がむくれて、血色がなく、青白くて、水死者を水から引っ張りあげたときの色。裏山の直径15センチくらいの木が、冬になると樹氷ができるように、常時粉をかぶったように真っ白になっていた。木は枯れてはおらん。青々とした色はなかったが、樹氷のような木のあたりが畑だった。水は川からとったのを使っていた。

今の病状で、顔がむくれ、体のむくれは腎臓病とか肝臓の悪い人がなるような……、そして、喉をやられ、喉頭結核が集まっているようにあります。声が出ませんね。結核菌に声をやられると、声が出なくなる。

鉾山敷地全体が喜右衛門の土地。借地代がもらえるわけで、それに甘んじて、病毒が家族全体に浸透しても、訴えるすべもなく、不安だが、仕方なく思っていた。

小林仁市郎（喜右衛門の妹スギの養子）さんの話（1976年ごろ聴取）

三ヶ村に来るとき、ふつうは客馬車で来るが、1回は赤牛に乗ってきた。1時間に2、

3 キロしか進まんやろうけど、どう考えてもおかしいっちゃんが。風変わりな人じゃった。

72-4 佐藤サキさん

戸籍によると

明治17年11月25日 佐藤ヨ子の子女として生まれる

昭和5年11月29日死亡(46歳)

佐藤正四さんの話(1979年9月21日聴取)

コナ(サキの通称)は「岩下」の浪太郎の妹。百熊の妻シマノの実の姉

土持栄士医師の話(聴取日不明)

肝硬変は黄疸が出て、肝臓が腫れて、腹水がたまる。はじめは腹だけだが、しだいに全身が腫れて、足まで腫れてくる。足の皮が破れて、ふとんがびっしょり濡れていた。(私が)最期をみとった。「それが、亜ヒ酸の影響かどうか、わからない」

今では考えられない療法だが、帯を締めて、針で水を抜いた。1回に3000ccくらいの水がとれた。「肝臓硬変化症に因する腹水のクロールカルチウム療法」。ぶ厚く古い医学の本に掲載されている。

昭和5年7月に開業し、サキが死んだのは11月だから、4か月しか診ていない。4、5日おきに往診した。当時は入院設備もなかったから。

サキは動けなかった。前に他の医者にかかっていたのですが、岩戸に私が開業したというので、私に往診を頼んできた。本人もあきらめていたのでしょうか。駆け出しの若い医者にかかっても、医者を変えようとせんかったのだから。

咳はあまりしなかった。「コナの薬をくれ」と言ってきた。このあたりは山^{さんやく}薬のことを「コナ薬」というので、「コナ薬はない」と答えたが、相手(正孝だったか)は「コナさんの薬」という意味だった。死亡診断書を書くときまで、本名が「サキ」とは知らなかった。

72-5 佐藤袈裟喜さん

明治38年4月12日生

昭和7年6月3日死亡

高見保(喜右衛門の妹スミの長男)さんの話(1976年ごろ聴取)

大正14年か昭和元年ですな。私が19、袈裟喜が20ですよ。正孝は5つ6つ下ですけど。村中遊んで回るとに、(喜右衛門の家族は)みんな顔色も悪いですな。坂を登るとき、

ハーハーいうてですよ。よう登らんとですよ。鉍毒でそんなになったとは思わずに、なんか体が悪いのやな、と。水晶山に水晶とりに行くとかいうてですよ。坂をよう歩かんのですな。ぜーぜーいいよったですがな。

富高暁（袈裟喜の従兄弟）さん、コユキさんの話（1979年11月5日聴取）

袈裟喜は、風邪かなんかひいて、コロッと逝った。体は小さかったが、親に似らんで、人物はよかった。

袈裟喜は、皮膚は真っ黒になっちゃった。あすこの子は全部、やけどした跡が黒くなるみたいに。煙は全部、あの家に向けて、上のがけから喜右衛門とこ向けてきよった。

72-6 佐藤サツキさん

明治40年1月10日生

昭和6年5月6日死亡

高見保さん（喜右衛門の妹スミの長男）の話（1976年ごろ聴取）

魅力なかったですよ。顔がむかばれてですよ。ツギミはそうまでなかったですけど。

サツキの死んだときは、ものすごかったらしいですよ。皮膚組織が崩壊してしまっただんでしょうな。死んでしまったら、人間の体は硬直しますね。24時間置かんと葬式できませんから、棺の下は水がいっぱい、皮膚が破れて、溶けて流れて、水が流れたんですな。油紙や紙やら集めて、棺の下に敷いたりしたそうですがな。私は今でも発掘許可を得て、土葬ですから、証拠は眠っておりますよ。

サツキがいちばんひどかったんでしょうな。腎臓、肝臓やられると、肺は肉が細ってしまいうんですな。腎臓関係はむくんで弾力がなくなって、内臓が侵されるのは間違いありませんよ。

72-7 佐藤ツギミさん

明治41年9月28日生

昭和12年4月11日死亡

陳内フジミさんの話（1979年9月21日聴取）

工藤保は「樋の口」の長屋に住んでいた。嫁のツギミの方が先に死んだ。子どもは3人。男2人と女1人。女の本名はタケ子だが、嫁に来てから「よしこ」と変えた。保の従兄弟の子がタケ子の主人。よし子は福岡に行った。よし子の弟が、高千穂中央公民館の下にもらわれてきて左官をしていたが、よし子のところへ行った。

保とツギミは胸をやられて死んだ。

富高暁（ツギミの従兄弟）さん、ユキキさんの話（1979年11月5日聴取）

見立の旅館に勤めていたとき、工藤保さんと「同じとこ出身」で知り合いになった。保さんは、まっとう前から見立鉾山に行っとうた。見立鉾山で結婚して、長屋に帰ってきた。ツギミが兄弟でいちばん人付き合いがよかつた。体は健康。サツキは、体が弱かつた。

佐藤ハルエさんの話（1979年7月12日電話で聴取）

わたしたちより3つ上。夫の保さんは尾谷の人。ツギミさんの墓は、うちの横（喜右衛門一族の墓のある所）にあつたけど、富高屋のばあちゃんの話では、尾谷に納骨堂をつくるときに掘り上げていつたらしい。保さんと一緒に住んでいた長屋は、工藤ホーさんの家の前にあつた1軒か2軒の長屋。

72-8 佐藤正孝さん

明治45年1月1日 喜右衛門の二男として生まれる

昭和26年4月17日、39歳で死亡

米田嵩さんの話（1976年7月11日聴取）

昭和8年ごろ、中島鉾山の所長を真部^{まなべ}義一といつた。真部は鉾区を全部買ったあと、鉾区外もほしくなり、正孝にソロバンを出して、はじいて、「これで全部渡さんか」と言つた。正孝が「よかろう」と返事し、二人は手を打つた。そのとき真部の考えと正孝の考えは、一桁違い。正孝はまったく安い値で売ることになつてしまつた。それ以後、鉾夫たちは正孝のことを「ケタ違いの正孝」と呼ぶようになった。

正孝は、高千穂からやせた芸者を連れ込んでいた。金をもろうたら使うわけですな。

佐藤晴（喜右衛門の妹スギの2女）さんの話（1976年ごろ聴取）

家族がみんな死んでしまつてから、正孝が一人残つて、自分のうちをたたきつぶしてしもうて、絹の布団も叩き売つてしもうて、うちに来つたわけです。あちこち遊んで、それが母（喜右衛門の妹スギ）が気に入らんでね。40年くらい前です。

正孝は別に、頭も悪くなかつたしね。声が変なし、体も変な、顔が黒いあばたみたいになつてしもうて、「カエルの肌ごとあるが、汚い」ち、私たち言いつたですよ。

吉田ダイ（喜右衛門の妹スギの5女）さんの話（1976年ごろ聴取）

背が低かつたです。太つちよりました。どこに行つても怒られるもんじゃから、あつちこつち行つて、東国東のおばさん（百熊の妻シマノ）のうちにもだいが長くおつたらしいですな。

家財道具を売り払つて、全部で20円とかいいつた。絹布の布団に丹前、鍋、釜、鉾夫が去るとき置いていくのを喜右衛門がとつておいたものが、ものすごくあつたそうで

す。たたき売りして 20 円。「お前、その金を何に使うたか」ち、私の母たちが怒っちゃったですよ。『あそこにおれば、土地代で寝ちよっても食うていかれるとじゃが。なんで、そんなことして出ていかないかんやったか』ち、延岡のおスミおばさんところに行っちゃ怒られる。百熊さんに行っちゃ怒られる。長くはおれんで、どっか行ったんですよ。

小林仁市郎（喜右衛門の妹スギの養子）さんの話（1976 年ごろ聴取）

家財道具を売り払うとき、人とは相談しなかった。それで、三ヶ村へ来ると、高見君のお母さん（スミ）がガンガンいうもんじゃけ、おべっか言ってから、気持ちよく動いてもらおうと思うけど、すぐ「山の権利は……」と言われるもんじゃけ、1 か月もおったことない。土地から、家、家財道具、たくさん持っていた。前の鉾山長が置いていった布団の絹のキレが 1 尺くらい模様をつぎ集めたもの。什器。いろんなものがあった。水を入れても漏らんスス竹の行李。「夜具はどうした」と言うと、「何とも知れん者にとられたとよ」ちイセノ（喜右衛門の姪）さんが言いよった。「800 円がたあつた」ち言うたことがあった。「100 円くれ」ち、わしが言うたら、女をどこにもそこにも持っていたり、どこそこのカフェに 2 号さんがおるとか言うて、威張ってから、金皮の時計を持ってたり、そのころ北方の役場ぐらいしかなかったカメラを持っとるので、「写真機で写してくれ」ち言うと、「そんなに長いこと持っとるもんか」。自棄のやんばち、自暴自棄の生活をしたんですな。喜右衛門が死んだあと、使いつぶしたわけですよ。たいした金を持っとったですわ。この辺に来たときは、「ゼニがのして……」、刀を持ってきて、高見のおば（スミ）に「金貸してくれ」「5 円にしかなるもんか」。わたしのところに「正宗の脇差を持ってきた。100 円になるとよ」、うちの母（スギ）が「おれにくれたら、竹割包丁にするが」。門川に女がおったらしい。

土地をまとめて売れば、まとまった金もはいつたのに、チビチビ売ったもんじゃけ、金目につかんづく使いつぶして……、喜右衛門の死後、現金収入源はなくなった。

昭和 16 年の 3 月ごろ、体が悪くなって来て、「どうにかならんか」「どうもならん。権利を失うてしもうたから」「いま、持っとつたら、百万長者になつとつたのに」。「親父のようなケチなことせんばい」「おばさん、今度こそ土呂久に呼んでやるからな」。「大分へ行ってこないかん」と言って、しばらくおらんかったが、みすぼらしくなって帰ってきて、「ゼニ貸さんな」。柄のない槍を持って来たことがある。鉾山師が去ったあと、家宝とか槍を置いていった。「本ものの正宗」とか言いよった。正孝は、高千穂に帰って生活する気はなかった。声もしわがれて、長く生きるようには思えんかった。ガマガエルの肌というか、でこぼこして人間の色をしちよらんかった。モモ擦りして歩くようにしよった。

喜右衛門の方が知恵はすごかった。正孝も 10 年遊び暮らすとはすごい。

富高暁さん、ユキキさんの話（1979 年 11 月 5 日聴取）

炭鉾の景気のいい昭和 22 年ごろ、正孝がここ（福岡県鞍手町の三菱新入炭鉾）に来と

った。三菱新入の六坑の「協愛寮」にはいていた。炭鉱の募集にかかって来た。延岡から新入炭鉱に来とった榎（えのき）さんが、「富高さん、あんたの従兄弟が来とるばい」「どこの者な」「いつか訪ねるち言いよったばい」。突然訪ねてきた。従兄弟になるので出入りしよったが、23、24年ごろまでおったでしょうな。正孝は、新入の六坑に下がりよった。私どもはいちばん底。正孝は日が浅いから、坑内入ってすぐの浅いところ。通気のいい、新しいものでも辛抱できる個所。ここでは元気にしとった。皮膚は真っ黒うして、ぶつぶつみたいなのができてとったが。

大分からというて嫁さんを連れて……、ときどき女が面会に来よった。やめていくとき、女の人と一緒に大分方面に行った、と聞いた。年増の水商売の女、こじわの寄った厚化粧で、子どもはおらん。その女を「おトヨ」とか聞いたごとあるけど、その女は2度来た。

（清川フヨとの結婚のこと）知らん。子どもも嫁さんのことも聞いていない。「朝鮮巡査に行っ、帰ってきて、炭鉱に来た」とか聞いた。

大分で亡くなった。身元引受人がなくて、呼び出しが砂太郎宛にきたので、砂太郎が仕方なく行った、という手紙をもろた。

喜右衛門といっしょで、正孝を好いた者はおらん。

富松丈平さんの話（1980年6月14日聴取）

喜右衛門の家族で一人残った正孝、あれもここへ2度来た。1度目は、鹿児島の子を一緒に連れのうてき、子どもがでくるからと鹿児島へ女は帰った。子どもができたなり、離婚した。ここにおったっちゃ、イノチキできんから、直方の炭鉱に行った。そこからまた、他の女を連れてきて、6か月くらいおったでしょう。

正孝は、宮崎に帰ったっちゃ誰もおらん。頼るところないから、ここに来た。ここでは山仕事、切り出し、炭鉱の坑木に運びだしよったから。

朝鮮巡査に行った時分、真面目にしとった。わしが海南島へ行った留守の間（昭和17年1月～8月）に、正孝は朝鮮巡査に行った。終戦で鹿児島に引き揚げてきて、そこで（最初の妻清川フミと）知り合うた。子どもができた。子がおるはずじゃが。（戸籍では、昭和19年2月1日、恵子誕生）

家内をもろたちゅうて、深江に来た。6か月くらいおった。産み月が近うなって、嫁は里に帰った。それぎり来んのよ。正孝は「こんな仕事（山仕事）はようねえ」ちゅうて、炭鉱に行った。それから違う女と、女の連れ子（男、3歳くらい）を1人連れて戻って来た。そんなときも6か月くらい山仕事をした。「どこにも行くな。ここにおれ」ちゅうたのに、「こんな仕事しよっても、ラチあかん」。人のかかあ連れてきたんで、男が追いかけてきた。そして門川へ行った。

門川ではなんをしよったんかの。仕事ちゅう仕事せん。奥さんも仕事せんで、門川行っても、ほとんどいいイノチキせんじやった。門川の役場から、わしのとこに紹介状がきたです。生活保護もらわにや生活できん、というんで。そんなとき奥さんは、正孝をうっ捨て

て逃げた。正孝は生活保護受けながら死んだ。

知らせは、延岡の勝美（百熊の長男）が言うてきた。「死んだふうじゃ」と。門川の役場から通知はこなかった。悪いちゅうのは聞いたが、なんで死んだんかなー。やっぱ咳が出よったからかな。門川の無縁仏になっとるかもしれん。

（丈平所有の写真を見ると）口をキッと結んで気が強そう。意地っ張り。ダブルの背広、胸に万年筆、おしゃれ。半年滞在したのは2回だけだが、立ち寄ることはちょくちょくあった。

甲斐ミサエ（百熊の長女）さんの話（聴取日不明）

国東半島に行ってから、正孝と1度会ったことがあるんです。「あれもどこ行ったかわからん」て話がありよったですわねー。家もはっきり継がず、そのまま出て回っていたんですよ。国東に来たときは1にんだったですよ。

高見保さん（喜右衛門の妹スミの長男）の話（聴取日不明）

みんなの葬式をして、自分は逃げて出たんですよ。「ここおったら、俺も死ななならん」。そして熊本行って、鹿児島あたりを歩いて、鹿児島の人と結婚して、子どもが1人でけとったですけどな。体がだんだん侵されてきて、仕事ができなくなって、貧乏して、あちこち回って、最後に流れてきたのが、その門川です。そのときは、就労不可能になっちゃったですよ。私が川南開拓におるときに、1回来たことがある。まだその時は、死にそうにまではなかったですが。昭和23年ごろですよ。「こうこうして門川に来ておる」と。「保つあんを訪ねてきた」と言うて、私とこに1晩泊まって、まだ私のお袋のスミが元気だったから、お袋と話したりして、そのあと三ヶ村にも1回行ったらしいですがな。

門川ではだんだん体が働けんようになって、生活に困ってですよ。で、嫁女は子供連れて逃げて出たんですよ。門川の町でも収容する所はありませんからな。いまは、養老施設がどこでんでけて、それぐらいのことはでくつとですけど、あの当時はありませんかったから。あすこで亡くなって、肺ということよな、診断書は。行路病人ということで、国立療養所は処置しちよるとですよ。じゃから国立療養所で、共同処理場がありますわな・

門川町役場住民課厚生係の話（1980年6月16日、電話で）

行路病人の死亡は、以前、中央公民館の上に埋けて、木の塚をつくっていた。いま木の塚は腐ってしまつて、何もない。身元がわかれば、その人に引き取りに来てもらう。引き取り手がなければ、その地区のお寺に埋葬。

佐藤正孝（昭和26年4月17日死去）はどこに埋葬されているのか？ 門川のお寺を1間1軒訪ねるしかないのか。

6月17日、門川町内の4か所のお寺に電話するが、どこにもない。その夜、川南町の宗隆寺に電話。「電話ではなんだから、うちに来なさい」

過去帳の名前を見つけた経緯（1980年6月18日）

以前、正孝の従兄弟の高見保さんから「国立川南療養所で死亡した」と聞いたことがある。1980年6月17日、翌日の宮崎地裁延岡支部での土呂久訴訟傍聴を兼ねて正孝の遺骨捜しを思い立った。川南町の国立療養所宮崎病院をたずねた。事務所で聞くと、当時の資料は残ってなく、もし引き取り手のない遺骨なら、近くの宗隆寺に預けたはず、との話だった。すぐ宗隆寺を訪ねるが、誰もいない。同夜、延岡から宗隆寺へ電話した。住職が「電話ではなんだから、うちへ来なさい」。6月18日、裁判が終わって帰る途中、落合、菊村、中川と川原で宗隆寺に立ち寄る。「昨日電話した」と言うと、すぐ過去帳を持ってきて、26年のところを開いてくれた。あけたそのページに、「あっ、あった」。思わず叫んだ。佐藤正孝の名前を見つけたのだ。

浄土真宗本願寺派宗隆寺の過去帳より

宗隆寺：宮崎県児湯郡川南町中里（大字平田 5907）

昭和 26 年

法名 釈正定信士

4 月 17 日亡

西臼杵郡岩戸村

行路病者 国立にて死す

俗名 佐藤正孝

行年 39 歳

宗隆寺住職 昇高 宗隆 さんの話（1980年6月18日聴取）

このお寺は私が建てたんです。わしは広島生まれでな。川南のお寺に修行に来たが、追い出されて、このままでは帰ることもできん。借家して浄土真宗本願寺派の説教所を始めた。借家から、昭和 12 年 6 月 1 日にお寺を始めた。それで、わしの名前と同じ、宗隆寺とした。名前は「しょうりゅう」と読むが、お寺は「そうりゅうじ」。

昭和 33 年にわしは大阪のお寺に行って、その間、息子がこの寺の住職をした。昭和 52 年にわしが帰ってきて、息子が交代で大阪へ。昭和 33 年までは、療養所で死者が出ると、わしが葬式に行ってお経を読んだ。

（過去帳を見ながら）昭和 21 年ごろから、療養所で経を読んだことは何べんもある。結核というたら、戦後すぐの時期、みんなこわがってな。自分の子どもが死んだと知らせがあっても、その親が引き取りにこん。引き取り手のない遺骨は預かっていたが、探してみても（佐藤正孝の骨が）ないところをみると、取りに来たっちゃるかな。二ツ橋の向こうの山の中に、療養所が火葬場をつくっていた。そこで、焼いたんじゃな。

72-9 佐藤カホルさん

大正2年10月15日生

昭和6年2月19日死亡

吉田ダイ（喜右衛門の妹スギの5女）さんの話（1976年ごろ聴取）

亜ヒ酸のために目があんまり見えんごとなった。サキが死んで49日もたたんうちに死んだ。

佐藤ハルエさんの話（1977年1月聴取）

うちと同級生。いっしょに入学して、いっしょに卒業した。いつも連れのうちで学校へ行った。目がはしとった。小さいとき、ハシカをひいて走った。大正14年に学校を出てから、向土呂久のサミさんところに子守の住み込み奉公に行った。

富高暁（カホルの従兄弟）さん、コユキさんの話（1979年11月5日聴取）

カホルが死んだとき、村の人が友引に式を出したらしい。「友引じゃけ、晩の12時過ぎんと、葬式出されん（野辺送りされん）」と言うのに、村に人がちっとでん早ええ方がいいもんじゃけ、「あのクソ親父の喜右衛門とこじゃけ、かまうもんか」ち、時計の針を12時にして出した。喜右衛門は、それほど村の人から憎まれとった。「友引で葬式出したけ、あの家はバタバタ死んだ」という噂。

72-10 佐藤喜右衛門一家のこと

土持栄士医師「土呂久残酷物語」より

喜右衛門のことを中心に書いたものだ。一部の医者、役人に配ったようだ。マル秘だが、1976年3月1日、川原が訪ねたときに見せてくれた。

以下、同書による。

サキ：肝硬変によって腹水がたまった。全身が水膨れのようになって、足の皮が破れ。

液がしたたり落ちたて畳を濡らしていた。クロールカルチウムの利尿作用を肝硬変の副シイ治療に使って著効を奏する、ということをも母校で習い、実験して興味を持っていた矢先、いちばん最初に現れた患者がサキだった。

喜右衛門：「こじっこり」（小柄でしつかりした）男。5尺1〜2寸（157〜158センチ）

くらい。痰持ちぜん息など呼吸器疾患であった。結核かどうか確かな証拠はない。娘のうち1人（カホルと思われる）：トラホームパンヌス（目が白くおおわれて見えなくなる）

もう1人の娘（ツギミと思われる）乾性肋膜炎だったと思う。

もう1人の娘（サツキであろう）思い出せない。

正孝：いちばん元気坊主。サキの薬をとりきっていた。

袈裟喜：すべすべしたかわいい男。女に関心がわかにと言っていた。一度診察した。

佐藤光さんの話（1979年11月6日聴取）

カホルが私たちより1級か2級上。片一方の目が子どものときから悪い。

袈裟喜は、何人も嫁さんもろたが、つづかんで、みな別れた。

ツギミは見立鉦山に行っちゃった。見立で働きよるとき、サツキが死んだ。私と甲斐金男（会堂に住んでいた）が見立の山越して「姉さん死んだ」と知らせに行った。ツギミは工藤さんといっしょになって、見立鉦山の社宅におった。工藤は見立の機械夫で、中島でも働いた。

正孝とツギミは、同じ体つき、がっちりした。正孝が最後まで残った。

サツキはぜーぜー一いよった。あとの人は、そう弱かったとは思わん。」

喜右衛門とこによく行きよった。遊びに行っても、お茶もろうても飲む気にならん。タラをたいて皿にのせて出しよった。皿に乗せたお菓子も食べる気にならん。気持ち悪かった。煙害でぜん息がおきたんじゃろか、寝たきり。

確実に煙害でやられたのが喜右衛門の身内。百熊は途中で逃げ出したんで、その後の消息きかない。

富高暁さん、コユキさんの話（1979年11月5日聴取）

喜右衛門の家で缶詰（モモとか果物の甘いやつ）の缶を食べる。そのあと、缶に痰をして、いっぱいになると、娘たちが前の小さい川に流しよった。「川下の人は、それを飲まんといけんのやが……」と思うた。

「かな山の者な、みなぜん息もちやが」。顔はやられちよるということは、みんな言いよった。内臓までやられるとは一。

鉦山の風呂と一緒にいると、背中から真っ黒やったけ。喜右衛門の一家は真っ黒やった。百熊さんとこの子は、そうなかった。

高見保さん（喜右衛門の妹スミの長男）の話（1976年ごろ聴取）

夏休みによく行って、遊びよったですがな。トーモロコシのできるころですな。馬の産地だったんですから。あの当時はもう、屋敷の裏の山はですな、えびの高原の樹氷ですよ。真っ白ですよ。あれが害とも思っておらんかったんですから。亜ヒ焼きの煙がですな、100メートルしか離れとらんんですから、山を背に、喜右衛門屋敷は鼻の下に煙突があるも同じですよ。知らず知らずのうちに、鉦毒に冒されたんですな。

喜右衛門の家の前は、幅20センチくらいの溝で水が通っていて、これを飲んどったですな。

佐藤晴（喜右衛門の妹スギの2女）さんの話（1976年ごろ聴取）

母（喜右衛門の妹スギ）があそこへ行くたびに言っていました。「みんなで『金取りがええ』ちいうもんで、家内中鉦山で働いている。声もでらんし、みんな変なかつこうしとる。『金取りがええ』ちいうても、寿命縮めるばかりじゃ」ち母が話してました。土地代だけでも、食えるだけあったんですよえ。

吉田ダイさんの話（1976年ごろ聴取）

わたしが喜右衛門さんところに行ったのは6つくらいするときじゃなかったかね。喜右衛門さんの父か母が死んだとき（モヨの死は昭和2年1月18日、ダイは8歳）行ったらしいですがね。あんまり覚えちよらんですが、昔田舎にあったのは、コットンコットン水がたまると回る水車。喜右衛門とこのは、ぐるぐる回る。機械の仕組みが違う。

病人の介抱するとに、火鉢の横の卵が凍る。そんなに寒いときじゃなかったですかね。高千穂は寒かった。

佐藤常義さんの話（聴取日不明）

喜右衛門屋敷の庭は、痰がいっぱい歩けんごとあった。